

神代に繋がるミソギの物語

●新嘗祭と大嘗祭

一年を通して多くある宮中祭祀の中で、最も重要とされる「新嘗祭（にいなめさい・しんじようさい）」が、皇居・宮中三殿にある神嘉殿で、去る十一月二十三日、無事に執り行われました。「新嘗祭」では、天皇陛下が五穀豊穣に感謝し、今年収穫された新米などの新穀（初穂）を神々に御供になります。そして、来たるべき年の豊穣を祈られます。この「新嘗祭」をもって、陛下ご自身も初めて新米を口にされます。この日まで新米を口にされません。

十一月二十三日と言えば「勤労感謝の日」ということで国民の祝日ですが、戦前までこの日は「新嘗祭」として定めた祭日でした。「勤労感謝の日」というのはGHQが名付けた祝日です。日本人であれば、本来「新嘗祭」と呼ぶのが正式名称ということになりますので、ぜひ覚えていただければ幸いです。来々年4月末に退位される陛下にとつて、今回が最後の新嘗祭となりました。ちなみに、天皇陛下の即位後に初めて行う新嘗祭を「大嘗祭（だいじようさい）」と言います。

一年一度の「新嘗」、天皇陛下一代一度の「大嘗」と区別されます。大嘗祭は、古代から続く天皇陛下御即位の儀式です。

特質すべきは、「大嘗祭」では心身を

清める御禊（けい）があり、天皇陛下自らが「水で禊（ミソギ）」を行われるのです。この「ミソギ」をもって、あらたな天皇陛下の資格が完成するものとされており、天皇陛下の「水で禊（みそぎばらい）」を行う儀式は、古事記・日本書紀にはじまる、神代につながる禊（ミソギ）の物語です。

真成寺で年末に開催される【冬至水行祭・ほしまつり】ですが、皆様へ「水行の実践」をお勧めさせていただく動機もここにあります。

●水行（みそぎ）の意義とは？

私は皆さまへ、「水行（すいぎよう）の実践」を心から、お勧めいたします。

▼水行の意義は3つ▼

①生かされている命の黄泉帰り（よみがえり・蘇り）

②心のみそぎ（感謝と反省）

③人格形成（魂という名の仏性明德を磨く）

総じて水行（ミソギ）とは、簡単に一言で「心のアカ落とし」と言えます。

一年の穢（けが）れとは、心にたまった垢（アカ）です。一年の垢を落として新年に良い運氣をもたらす「禊祓」。〈宿垢〉を去る「水行」です。

「みそぎ」の語源説としては、水滌みずそそぎ、あるいは身漬みずそそぎの意味で、ツミ・ケガレを身体から取り去る身削（みそぎ）の意と解する説もあります。中世以降は水垢離（みずごり）などとも称

して、修行的な要素も加わり、精神的な清浄も重視されるようになりました。

●水行・禊祓の起源は？

イザナギノミコト（男神）が、妻だったイザナミノミコト（女神）に会いに、黄泉国（よみのくに）へ行きました。黄泉国から戻ったイザナギノミコトは、黄泉国の穢れを祓うために、筑紫日向（ちくしひなた）の橘（たちばな）の小門（おど・小戸）の阿波岐原（あはきはら）で禊を行なわれた事が始まりです。

※阿波岐原（あはきはら）は、現在の九州は宮崎県宮崎市阿波岐原町にあたる。「阿波岐原」は町名として今もまさに存在しています。

ところで、この禊祓によつて、三貴神（さんきしん）と呼ばれる、日本の神様の代名詞である尊（みこと）が御誕生になりました。日本の神様と言えは、その名は「天照大神（アマテラスオオミカミ）」です。

【記】の物語はこうです：「左の目を洗いになった時に出現した光輝く女神アマテラスオオミカミ（天照大神）、右の目を洗うと清らかに輝くツクヨミノミコト（月読命、鼻からは逞しいサノオノミコト（須佐之男命）がそれぞれ出現された」と、故事があります。天照大神は高天原（天上界）。月読命は夜之国。須佐之男命は海原を、それぞれに統治する三柱の神様として古来尊崇されております。

※禊祓でイザナギノミコト（伊邪那岐命）

から十四柱もの神様が生まれます。そして、この三貴神にそれぞれ高天原夜之食国、海を任せ、ご自分は幽宮（かくりみや）を造り隠居されました。

●穢れと、お清め

穢れ（ケガレ）の語源は「気枯れ」。気が枯れて生命力が弱まっている状態のことを言います。そんな穢れを祓うということは、心身をリフレッシュして、あらたな生命力を蘇らせることをいふ「黄泉がえり（よみがえり）」です。

穢れは抽象的な観念で、罪、禁忌、過ち、死、災い、と結び付けられて考えられるもの。それは必ずしも「悪いこと」ではなく、たとえば死は穢れの最たるものとして扱われ、一定期間、祭事への参加や神社参拝を差し控える日本の文化。これは神が穢れに触れないようにするために。死を罪や過ちと同一視しているというわけではなく、穢れは「気枯れ」と書くように、精神的に沈んだような状態のことも指しています。

またお清めとは、「不浄」なものを払拭し、「穢れ（ケガレ）」を浄化すること。つまり、空間や身体にまとわりついた穢れを落とすことで、神を迎え、神に近づくことのできる状態を作るものと考えられてきました。神社の手水屋（ちようずや）で手を洗いますが、あれは禊を簡略化した儀式です。「清浄」や「不浄」のどちらも衛生的な状態を言い表すのではなく、事象の

神聖なあり方を指します。不浄とは、そうした意味において理想的でない状態のことを指し、「穢れ」とも言います。そのための儀式として「祓（はらい）」や「禊（みそぎ）」が行われます。身体についた汚穢おえを祓い清める祈りの儀式です。

また禊とは「水ぎ」ともいい、穢れを清浄な水で水浴して清める宗教儀式。身心の罪や穢れを水で洗い清める祓、浄化の所作とする禊祓（みそぎはらい）。死や出血や出産など異常な生理的事態を神秘的な危険として客体化したもので、異常な忌の状態から正常な日常へ立ち戻る一種の再生儀礼として認識いただければ宜しいと思います。

●一揆一揆（いちあいいつさつ）

さて、今年で早十一回目を数える「冬至水行祭・ほしまつり」。一年、また一年と、毎年、色んな物語を紡いできました。思えば、その年々それぞれの念いを込めて水行に臨まれた参加者の皆様方。そしてその念いを真っ直ぐに迎える実行委員会・ボランティアスタッフの想いが、これまでの十回という歴史を生んできたと思います。十回一区切りとするならば、今年の第十一回開催から、また新たな景色を皆さま方と創り上げたいと考えています。

そこで今年テーマを決めました。「一揆一揆」・・・「いちあいいつさつ」と読みます。いわゆる【挨拶（あいさつ）】の語源と言われています。【挨拶】

とは、目に見えないモノ、目には見えないモノ、その全てに畏敬の念を抱き臨むこと。挨拶には色々な挨拶がありますが、例えば人と人の関係でいえば、コミュニケーションの基本であり、心の潤滑油にもなるはず。そうやって、礼節を重んじながら、互いの心を切り結び、生かされ合う命に向き合うことを【挨拶】と言うのでしよう。そう、『冬至水行祭・ほしまつり』の水行は、まさに【挨拶】の理念と重なります。

●一年の締めくくりに

生まれたばかりの赤ちゃんが産湯につかるように、心機一転をはかり、新たに生まれ変わる事を意味する命の蘇り（黄泉帰（よみがえり））。自分の罪や過ちを認め、それを神仏に告白し悔い改める。悔い改め、神仏に誓いを立てる方法としての水行。

これまでの体験や経験に、本当の意味で心から感謝できる事こそが「心のみそぎ」となり、精神的な命の蘇りが適うのです。日は沈み、また昇るといふ自然の摂人の心と身体も生まれ変わりを繰り返す。人生に感謝の念を込め、今年一年の締めくくりです。「平成」最後の水行です。清々しい気持ちで新しい年を迎えましょう。



《あれを見よ 深山の桜咲きにけり 真心尽くせ 人知らずとも》…桜は私達に見てもらったために咲いているのではありません。誰が見ていようと、見ていなくても、精一杯咲き誇っています。自分の役目を全うするように。

幾月日が過ぎようと冷め止まないその熱気は、水行に臨む一人一人のほとぼしる志の輝きであり、それを目の当たりにされた皆さま方のそれがあって為されるものです。

《あれを見よ 水行に臨む人の志 天命尽くせ 人知らずとも》…今年一年間に感謝の念を込め、来たる新年に決意を固める。

「水行」の経験が、皆様の掛け替えのない人生のターニングポイントになる事を願って止みません。

合掌 副住職 谷川寛敬



ラニ・フラ・ホア

今年一年を振り返って



今年、3月まで入院を繰り返す様な私でしたが、生徒の皆様方、そして家族の深い愛に包まれたサポート、ご協力のお陰で、楽しくこの一年を過ごす事が出来ました。有難うございました。5月の環水公園ハワイアンフェスティバルに始まり、8月上野方の夏祭り、9月アロハヘブン、10月まるまる魚津。そして11月は、隔年開催のフラパーティー（ラニフラホア主催・スカイホテルにて）。これは、無礼講で、好きな方と好きな曲を好きなフオーメーションで踊る。個性が現れる楽しい会です。余興は、きみまろの小話で笑いがあつたり、色んなダンス（健康講座を含んだあいつべ体操やゴーゴー体操・港町13番地・USA千本桜等）エビカニピクスは楽しそうに会場内全員踊っていました。（フラ以上方が入っていたようかな？（笑））そして、豪華（？）商品が当たる抽選会と続き、大盛り上がりのお開きとなりました。本当に楽しかったですね！今年踊り収めのイベントは、12月1日、千葉市民会館で開催のフランドレイジングコンサートです。みんな素敵なフラが踊れます様に！